

地域・官署による簡牘形状の違い

——敦煌漢簡「兩行」簡を中心に——

高村 武幸

はじめに

日本国内において簡牘の形状や製作技法に関する研究が本格化してからかなりの時間が経過しており、⁽¹⁾筆者も形状分類に関する拙稿を発表した。⁽²⁾その際、漢代史料中「兩行」と称される二行書の簡牘に、居延出土の漢代簡牘では書写面が平坦なものがほとんどであるのに対し、敦煌出土のそれでは書写面を一行毎に分かつ稜線を持つものが見られる旨を指摘した(図①参照)。ただし、当時は公表された敦煌漢簡の写真が少なく、詳細な検討を欠いた印象論を述べたにとどまった。また、簡牘の各部の寸法の情報が少なく、現物で計測するにも簡牘の数量の多さから無理があった。その後、敦煌懸泉漢簡の公開が進むなど利用できる史料が増加した上、テキストに簡牘の寸法や樹種



図①
 左：居延漢簡10.34 (A33)
 右：敦煌懸泉漢簡 (I90DXT0112③:1)
 出典：左は後掲註(10)彩色図版7頁、右は『敦煌懸泉漢簡』巻、150頁

などの情報が収載される例が増え、飛躍的に詳細な検討が可能となりつつある。

そこで本稿では、漢代河西四郡の敦煌郡域出土敦煌漢簡中の「兩行」簡を中心に、同じ河西四郡の張掖郡域出土居延漢簡「兩行」簡と比較して検討する⁽³⁾。これにより、地域・官署間で、同種の簡牘に形状をはじめとした差異が存在するのか、存在するならばその理由を検討し、簡牘の地域差にまで研究を深化させる手がかりを得たい。

議論の前提として、本稿で中心的に取り上げる「兩行」簡について触れておく。

凌胡隧厭胡隧廣昌隧各請輸札兩行隧五十繩廿丈須寫下詔書

(……凌胡隧・厭胡隧・廣昌隧それぞれ札と兩行を隧)ことに五〇、繩二〇丈を輸送することを申請し、書き写して詔書を下さなければならず……)

敦煌漢簡[684A/T VI b.1.152

このように史料には明らかに書写材料として「兩行」がみえ、字義の通り二行書の簡牘であるが、簿籍類などは明らかに一行書の「札」と考えられる簡に小さな字で二行記す場合もある。前掲註(2)拙稿で形状分類の試案を示した際、「兩行」簡を○二型「幅が文字二行を書写してある、または書写すると想定されるもの(想定を目安として幅約一五(二九ミリ)」としたのは上述の点を踏まえたためである。ただしこれだと「札」への小さな字での二行書きの扱いが難しくなる。とすれば、確実に書き手が「兩行」を利用しているとの意識を持っていたと考えられる事例に限定して集成・検討することが望ましい。そこで、前漢後半期以降の公文書については「兩行」を用いた冊書が正式のものと考えられていたとの指摘を踏まえ、⁽⁴⁾公文書の書写に用いられた「兩行」簡を対象として集成した。ただし一部に公文書に近い使われ方をした、書信の一種である「記」も含まれている。⁽⁵⁾欠損のある簡牘でも「兩行」簡としての幅が保たれていると判断できるものは採用したが、一見して幅が保たれているようでも、削衣とされるものについては除外した。また、以下の文中では、小数点以下は第一位までの表記とし、それ以下は一部を除き切り捨てとした。懸泉漢簡の「懸」字は、懸泉漢簡中の表記は「縣」とされる事例が多く、引用史料では史料そのままの表記とし、史料名・遺跡名としては「懸」で統一した。

一、敦煌漢簡・居延漢簡にみられる「兩行」簡

(1) 敦煌漢簡

敦煌漢簡の集成では、比較的鮮明な写真が公開されている敦煌懸泉漢簡・敦煌馬圈湾漢簡・敦煌玉門関漢簡を対

表① 懸泉漢簡有稜簡・無稜「兩行」簡
文書種別比較

| | 種別 | 上行 | 下行 | 平行 | 不明 | 伝 | 総計 |
|----|----|------|------|-----|------|------|-----|
| 有稜 | 数量 | 24 | 64 | 4 | 11 | 0 | 103 |
| | % | 23.3 | 62.1 | 3.8 | 10.6 | 0.0 | 100 |
| 無稜 | 数量 | 35 | 25 | 3 | 12 | 38 | 113 |
| | % | 30.9 | 22.1 | 2.6 | 10.6 | 33.6 | 100 |

※%は小数点第2位以下切り捨て

象とした。各史料群で公開されている情報に差があるため、本稿末尾に樹種・幅と厚さ
で判明する懸泉漢簡を一覧表1-1、幅のみ判明する敦煌玉門関漢簡を一覧表1-2、写真
のみの馬圈湾漢簡を一覧表1-3として分けて掲げておく。

懸泉漢簡「兩行」簡は二一六点で、うち有稜簡は一〇三点(四七・六%)、無稜簡は一
三点(五二・三%)となる。馬圈湾漢簡「兩行」簡は一六点で、うち有稜簡九点(五六・二%)・
無稜簡七点(四三・七%)、玉門関漢簡「兩行」簡は三一点で、うち有稜簡一七点(五四・
八%)・無稜簡一四点(四五・一%)となる。総計では、「兩行」二六三点中、有稜簡一二九
点(四九・〇%)・無稜簡一三四点(五〇・九%)となる。このように敦煌漢簡では、半数近
くが有稜「兩行」簡となり、懸泉置と玉門・馬圈湾のように距離が離れた遺跡とで、数量
差はあるが大体同様の傾向を示していることがわかる。

次に、有稜「兩行」簡が好んで用いられる場面があるのかどうかを確認する。一覧表1-1-3に示した敦煌漢簡
の有稜「兩行」簡は上行(下級者から上級者へ)・下行(上級者から下級者へ)の両公文書に利用されるが、利用される
文書の種別には偏りがみられる。表①によれば、懸泉漢簡では有稜「兩行」簡の六割以上が下行文書に用いられて
いる。下行文書は、出土遺跡である懸泉置が所属していた效穀県や、その上級機関の敦煌郡等から送付された正本
が比較的多いと推定される。

表②で上行文書・下行文書の字体を分類して数量を比較した。字体が謹直か崩れているかは筆者の主観により、

表② 懸泉漢簡「兩行」簡字体比較

| | | 上行文書 | | | | 下行文書 | | | |
|----|----|------|------|-----|-----|------|------|------|-----|
| | | 謹直 | 崩 | 不明 | 小計 | 謹直 | 崩 | 不明 | 小計 |
| 有稜 | 数量 | 15 | 8 | 1 | 24 | 48 | 13 | 3 | 64 |
| | % | 62.5 | 33.3 | 4.1 | 100 | 75.0 | 20.3 | 4.6 | 100 |
| 無稜 | 数量 | 24 | 10 | 1 | 35 | 19 | 6 | 0 | 25 |
| | % | 68.5 | 28.5 | 2.8 | 100 | 76.0 | 24.0 | 0.00 | 100 |

参考程度にしかないが、有稜・無稜「兩行」簡ともいずれも謹直なものが多く、当地の官吏の「兩行」簡に対する意識がうかがえる。ただし下行文書では謹直なもの七五％（有稜）・七六％（無稜）に対し、上行文書では六二・五％（有稜）・六八・五％（無稜）とやや少なく、また崩れたものでは下行文書は二〇・三％（有稜）・二四％（無稜）

と、謹直なもの三分の一以下であるのに対して、上行文書は三三・三％（有稜）・二八・五％（無稜）と、謹直なもの二分の一程度となり、謹直な書体の文書に正本が多いということであれば、下行文書に正本が多かったという先の推定と矛盾はない。以上の点からみて、少なくとも正本として他の官署へ送付する場合、有稜「兩行」簡が選ばれる傾向がある。

一方、無稜「兩行」簡については、上行文書がやや多いが、下行文書も少なくはなく、明確な差はないが、無稜「兩行」簡には伝（通行証）の事例が多い一方、有稜「兩行」簡には伝の事例が極めて少ないという特徴がある。懸泉漢簡中の伝は、懸泉置を通過した者が所持していた正本の写しが大半を占めると考えられるが、関所の遺跡であり、同じく写しが大半を占めるとみられる肩水金關遺跡の伝では、三行以上書写された事例が多数見受けられる。この点からみて、伝は三行書きにも使える平坦でやや幅広な簡牘が利用されており、それがたまたま二行で完結した結果、無稜「兩行」簡となったとすべきであろう。

以上の点から、有稜「兩行」簡は有稜のゆえに明確に「兩行」簡であるとわかり、そのため公文書正本に用いられることが多くなったと考えられる。

また、多角柱簡牘が檄に用いられることは複数の先行研究で明らかであり、本稿で集めた事例も有稜にすること
で多角柱形の簡牘に擬している可能性もあり得るが、以下の有稜「兩行」簡牘の事例から否定できる。

五鳳元年九月丙辰朔戊午縣泉置齋夫光敢言之謹移兵案勒簿

一編敢言之

(五鳳元(前五七)年九月三日、懸泉置齋夫光申し上げます。謹んで「兵案勒簿」一編を送付いたします。以上
申し上げます)

懸泉漢簡I 90DXTX0112③: 1A

鴻嘉三年七月辛未朔己丑敦煌長史充國行大守事庫守令守部千人喜兼行丞事謂郡庫效穀

今調牛車假效穀爲遮要縣泉置運甲卒所伐菱如牒書到遣吏持縣泉置前年所假牛車八兩輸郡庫(傍線筆者)

(鴻嘉三(前一八)年七月一九日、敦煌長史充國が大守を代行し庫守令守部千人喜が丞を代行して郡庫・效穀県
に通達する。今牛車を用意して效穀に貸し遮要・懸泉置のために甲卒が伐採した菱を運ばせることは牒の通り
である。この書が到ったら、吏を遣わして懸泉置に前年貸した牛車八両を持って郡庫……輸送……)

懸泉漢簡I 90DXT0110①: 22

みられるように、単純な簿籍の送り状(簿籍に添付)や、「書」とのみ自称するものなどが珍しくなく、もっぱら檄
として用いられていたとは考えにくい。

居延漢簡は、一九三〇年代出土居延漢簡・一九七〇年代出土居延漢簡・肩水金閼漢簡・地灣漢簡の「兩行」簡を対象とした。寸法が判明する一九三〇年代出土居延漢簡と地灣漢簡併せて一覽表211とし、写真のみの一九七〇年代出土居延漢簡・肩水金閼漢簡は簡番号のみを示し、それぞれ一覽表212・213とした。

一九三〇年代出土居延漢簡・地灣漢簡（一覽表211）では、「兩行」簡二一点中、有稜「兩行」簡と思われるものは一点、しかもテキストでは多角柱の觚とされている。

□之官移居延書曰萬歲里張子君自言責臨之隧長徐□

□書□□留□張子君買繪布錢少千八百五十不□

一九三〇年代出土居延漢簡132.36 (A8)

以上、一九三〇年代出土居延漢簡・地灣漢簡には有稜「兩行」簡は皆無ということになる。

次に一九七〇年代出土居延漢簡（一覽表212）は、「兩行」簡二八八点中、有稜「兩行」簡は一点である。

□得母有侵假藉貸錢財物以惠貿易器

□等不賈賣衣物刀劍衣物客吏民所證所言它如
爰書敢言之

一九七〇年代出土居延漢簡E.P157.97 (A8)

これは末尾の文言から上行文書としての特徴を持っているが、二行目末尾に詰めた小さい字でさらに二行に記すという変わった書き方をしている。上行文書だとすると、控え・草稿の可能性が考えられ、もう一本簡牘を用いないで済むための節約であろうか。

肩水金閼漢簡（一覽表213）では「兩行」簡二二八点中、有稜「兩行」簡と思われるものは一点のみ、しかも逃亡したとみられる個人の特徴を記載してあるなど、緊急性のある内容から檄の可能性も考えられ、であれば「兩行」

ではなく多角柱簡牘の可能性がある。

……年卅一、二歳長七尺一、二寸大壯赤色去時衣袴複襜褕縑單襜褕 (A面)

……驛牡馬大婢恩御恩年十五、六歳 (B面)

肩水金関漢簡 E.J.T30.94(A32)

従つて、肩水金関漢簡にも有稜「兩行」簡牘は皆無ということになる。

以上の通り、敦煌漢簡とは明らかに異なり、ごく一部に有稜の可能性が残るほかは全てが無稜「兩行」簡で、張掖郡地域では有稜「兩行」簡牘を作成・利用するという行為自体がほとんどみられなかったこととなる。

このように、同種の簡牘の官署による形状の違いが明確に存在することは疑いないが、それではなぜ、このような差異があらわれたのか。それを考えるため、次節では敦煌懸泉漢簡「兩行」簡の材質と形状から検討したい。

二、敦煌懸泉漢簡中の「兩行」簡牘の材質と形状

まず敦煌懸泉漢簡「兩行」簡の材質から確認する。テキストによれば胡楊・紅柳・松の三種が確認できる。⁽⁸⁾ 居延周辺では紅柳と胡楊が元々入手しやすいとみられ、⁽⁹⁾ また松は黒河上流域の祁連山脈で採取できる。前掲註(8)の指摘では敦煌地域でも状況は変わらなかったとみられる。

表③によれば懸泉漢簡全体の比率としては、紅柳が全体の五〇%を超え、以下、松が三〇%弱、胡楊が一八%となっている。これを有稜簡と無稜簡に分けて検討すると明確な差があらわれる。胡楊はいずれも一七%(有稜)・一八%(無稜)程度となっているが、有稜簡では紅柳七三%・松八%強に対して、無稜簡では紅柳三三%強・松が四

表③ 懸泉（壹）（貳）両行簡樹種表

| | 樹種 | 紅柳 | 松 | 胡楊 |
|----|----|------|------|------|
| 有稜 | 数量 | 76 | 9 | 18 |
| | % | 73.7 | 8.7 | 17.4 |
| 無稜 | 数量 | 38 | 54 | 21 |
| | % | 33.6 | 47.7 | 18.5 |
| 合計 | 数量 | 114 | 63 | 39 |
| | % | 52.7 | 29.1 | 18.0 |

七%強と、比率が逆転している。明らかに有稜「両行」簡牘には紅柳が利用される傾向が強い。

この事実を検討するため、さらに形状を詳しく確認したい。まず簡の幅であるが、表④によると、いずれも一二・一〜一五ミリが最も多い。ただし、有稜では一五ミリまでで六二%を超えるのに対し、無稜では四二%超に留まる。有稜簡の幅の平均は一四・五六ミリ、無稜簡は一七・一四六ミリで、有稜簡には幅が狭いものが多い。次に簡の厚さであるが、表⑤によると、いずれも二・一ミリ以上三ミリまでが最も多いが、有稜簡では三・一ミリ以上の占める割合が六六%を超えるのに対し、無稜簡では三ミリまでで八五%を超えるという違いがみられる。有稜簡の厚さの平均は四・三一六ミリ、無稜簡では二・七五九ミリと、有稜簡には厚みが多いことがわかる。

以上の結果から、有稜「両行」簡は幅が狭い反面厚く、無稜「両行」簡は幅が広く薄い、という特徴が明らかになる。有稜簡は稜の形成により厚みが増すことは想像に難くないが、幅が狭いことは何を意味するのか。

ここで今一度、有稜簡には紅柳がかなりの比率で利用される、という点を想起する必要がある。紅柳は河西回廊でよくみかける樹木で、漢代と現代との間での環境変動には注意せねばならないが、居延や敦煌の遺跡付近では地中の根が円錐状に盛り上がり、そこから枝が密生したような状態で生えている紅柳を多く目撃した（写真①）。二〇〇九年に漢代居延の地である額濟納旗を訪れた際、伐採された紅柳をみたが、幹の部位とみられる太い材はかなり曲がっているものが多く、むしろ細い枝の方が比較的曲がりや

表④ 懸泉（壹）（貳）両行簡幅比較表

| | 幅(mm) | ～6 | ～9 | ～12 | ～15 | ～18 | ～21 | ～24 | 24.1～ |
|----|-------|-----|------|------|------|------|------|-----|-------|
| 有稜 | 数 | 1 | 11 | 12 | 40 | 22 | 15 | 0 | 2 |
| | % | 0.9 | 10.6 | 11.6 | 38.8 | 21.3 | 14.5 | 0.0 | 1.9 |
| 無稜 | 数 | 0 | 5 | 11 | 32 | 26 | 17 | 9 | 13 |
| | % | 0.0 | 4.4 | 9.7 | 28.3 | 23.0 | 15.0 | 7.9 | 11.5 |

表⑤ 懸泉（壹）（貳）両行簡厚比較表

| | 厚(mm) | ～2 | ～3 | ～4 | ～5 | ～6 | ～7 | ～8 | ～9 | ～10 | 10.1～ |
|----|-------|------|------|------|------|------|-----|-----|-----|-----|-------|
| 有稜 | 数 | 6 | 28 | 27 | 20 | 15 | 6 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| | % | 5.8 | 27.1 | 26.2 | 19.4 | 14.5 | 5.8 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.9 |
| 無稜 | 数 | 46 | 51 | 10 | 4 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| | % | 40.7 | 45.1 | 8.8 | 3.5 | 0.0 | 0.8 | 0.0 | 0.0 | 0.8 | 0.0 |

かであった（写真②）。

漢代でも河西回廊は乾燥地域であったが、となれば曲がっていたとしても太い紅柳の幹は木材としては重要であったと考えられ、なるべく無駄なく利用しようという意識が働いたとすれば、幹から真つすぐな簡牘を作成することは、相当の部位を再利用も難しい端材として捨てざるを得なくなるため、避けられたのではないか。むしろ、細い上に元々比較的真っすぐな部位が少なくない枝を利用して簡牘を作成した方が木材全体の利用として無駄がない。筆者が台湾中央研究院歴史語言研究所で一九三〇年代出土居延漢簡を観察した際、紅柳の枝をそのまま利用したと思われる簡牘が複数存在したが、いずれも木芯が明瞭であった。⁽¹⁰⁾ 懸泉漢簡の有稜「両行」簡の写真の中にも木芯や節とみられる痕跡を有する例があり、⁽¹¹⁾ 有稜「両行」簡が紅柳の枝を材料に作成されたことを推定させる。

では、紅柳の枝を材料とした場合、何故「両行」が有稜となるのか。それは、「細い枝」というところに要因があると考えられる。

まず、実際の幅は一行書の「札」に近くても、有稜化することで視覚的に「両行」であることが強調できる点がある。前述の如く、前漢後半期に



写真② 紅柳の枝（上）と幹（下）

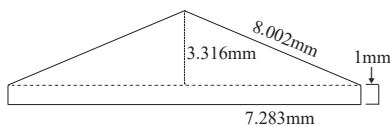


写真① 紅柳

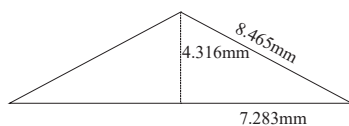
いずれも2009年8月、内蒙古自治区額濟納旗にて筆者撮影

降においては正式な公文書に「兩行」簡を使う意識が強かった。細い簡牘に小さい字で二行書きにした簿籍の事例は珍しくないが、細い簡牘に公文書正本を二行書写して草稿などと誤解されることを避けようという意識があれば、明らかに二行書用に作成された有稜「兩行」簡は、細い材料を用いて「兩行」簡を作成せねばならない状況下では有効な対処となる。しかも、紅柳の枝は直線的ではあっても緩く曲がっているものも多く、これに綺麗に縦に二行書写するための「罫線」としても有用で、かつ書写面を平坦にしてさらに書きやすくできる。

加えて、幅が狭い材料を利用して二行書の簡牘を作成しなければならない場合、一行ごとの書写幅は少しでも広い方がよい。その際、稜線を設けて斜めの書写面を作れば、平坦な書写面よりは書写幅が広くなる。有稜「兩行」簡の平均の厚さ四・三一六ミリ、平均の幅一四・五六七ミリを元に試算すると、一行当たり約八・四六五ミリとなる。これを二倍すると一六・九三ミリとなり、全体で二・三ミリ以上、元の七・二八三ミリから一行当たり一ミリ以上の拡幅になる(図②)。実際の有稜「兩行」簡牘では、断面が平たい五角形になると考え、厚さから一ミリ分を差し引くと、一行当たり約八・〇〇二ミリとなり、これを二倍すると一六・〇〇四ミリ、全体で約一・四三ミリ、一行当たり〇・七ミリの拡幅となる(図③)。無稜



図③



図②

「両行」簡の幅平均値一七・一四六ミリと比べ、有稜化しない場合は、有稜「両行」簡の平均幅をひとすると、無稜「両行」簡の幅は約一・一七倍だが、三角形に近く有稜化して約一・〇一倍、五角形で一・〇七倍となり、有稜化した方が書写幅が無稜「両行」簡に近くなる。

こうした工夫に、有稜のものがある竹簡の複数行書写簡牘が影響した可能性はどうか。例えば陶安あんど氏は、竹は円筒形であるために幅広の書写面をとるために多面体を作る他なく、一行程度しか書けない書写面が隆起をはさんで並ぶこととなつた上で、木簡より竹簡が「両行」の本来の姿である可能性を指摘する。⁽¹²⁾ 実際、紅柳の枝も筒ではないが細い円柱形であり、二行書の簡牘を作成するには同様の処理が必要となり、竹簡の「両行」が、紅柳を中心とする敦煌の有稜「両行」簡に、作成上の影響を与えた可能性はある。ただし、無稜「両行」簡が敦煌でも少なからず利用され、張掖郡域に至ってはほぼ皆無という状況を見ると、少なくとも前漢後半期の河西地域では「両行」を竹簡に似せて有稜化せねばならない、との意識により有稜化したとはいい難い。また、後漢中期の五一広場漢簡でも「両行」はほぼ無稜である。⁽¹³⁾ すると、前漢前半期ぐらいまでは「両行」は竹を模すという意識があつたとしても、前漢後半期以降薄れていったと思われる。従つて、細い円柱状の紅柳の枝を有効に「両行」化する技法として、敦煌郡域では有稜化技法が選択され、それが物理的に竹簡「両行」簡の作成方法と類似したものであろう。

以上、敦煌懸泉漢簡を中心に、敦煌郡域の有稜「兩行」簡の材質と形状をみてきたが、基本的には敦煌郡域において、紅柳の枝を有効に利用するための工夫によるものと考えられる。それでは、なぜ張掖郡域の居延地域では、そうした工夫がほとんど簡牘から見受けられないのであろうか。節を改めて居延地域の「兩行」簡の形状を確認した上で考察する。

三、居延漢簡中の「兩行」簡の形状と簡牘形状の地域性

(1) 居延漢簡中の「兩行」簡の形状

張掖郡域の漢簡中、寸法が判明するのは一九三〇年代出土居延漢簡と地湾漢簡であるが、A八甲渠候官遺跡・A三二肩水金閔遺跡といった一九七〇年代出土居延漢簡と同じ遺跡からの出土簡に加え、A三三地湾、すなわち肩水候官遺跡をはじめとする他の遺跡からの出土簡牘も含まれるため、張掖郡域のサンプルとしての意義は十分であると考えられる。

一例を除いて全て無稜「兩行」簡であり、有稜簡を除いたその幅の平均は一九・九五七ミリと、敦煌懸泉漢簡の無稜「兩行」簡牘よりさらに二・八一ミリ広く(表⑥)、また厚さの平均も三・五三八ミリと〇・七ミリ以上厚くなっており(表⑦)、全体として懸泉漢簡無稜簡より幅広・厚めの作りとなっている。それを示すように、簡幅も一・五ミリ以上のものが八七・六%を占めており、五七・五%を占める懸泉漢簡無稜簡より三〇%多い。厚さも三・一ミリ以上が四九・五%を占めており、一四・一%を占める懸泉漢簡無稜簡との差は明確である。ただし厚さについ

表⑥ 1930年代出土居延漢簡・地湾漢簡無稜「兩行」簡幅表

| 幅(mm) | ~6 | ~9 | ~12 | ~15 | ~18 | ~21 | ~24 | 24.1~ |
|-------|-----|-----|-----|-----|------|------|------|-------|
| 数 | 0 | 0 | 8 | 18 | 56 | 64 | 29 | 35 |
| % | 0.0 | 0.0 | 3.8 | 8.5 | 26.6 | 30.4 | 13.8 | 16.6 |

表⑦ 1930年代出土居延漢簡・地湾漢簡無稜「兩行」簡厚表

| 厚(mm) | ~1 | ~2 | ~3 | ~4 | ~5 | ~6 | ~7 | 7.1~ |
|-------|-----|------|------|------|------|-----|-----|------|
| 数 | 1 | 23 | 82 | 72 | 31 | 0 | 1 | 0 |
| % | 0.4 | 10.9 | 39.0 | 34.2 | 14.7 | 0.0 | 0.4 | 0.0 |

① 行政機構の業務量の違いによる可能性

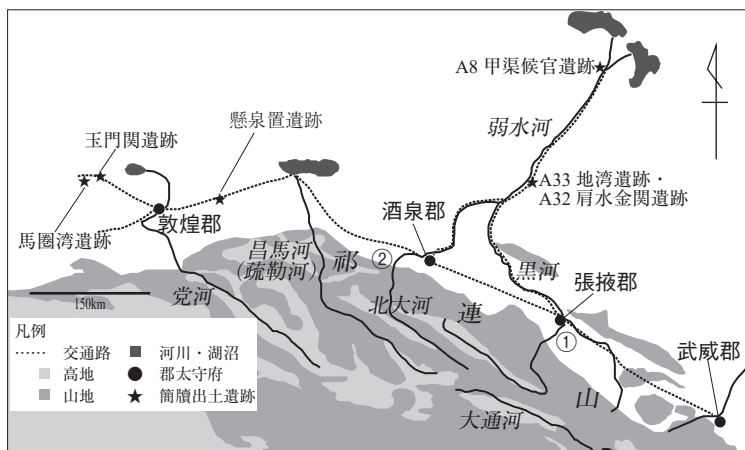
ては、四・一ミリ以上は一五・二%で、そこまで大きな差ではないともいえる。また懸泉漢簡有稜簡の厚さの平均四・三一六ミリよりは一ミリ弱薄く、有稜簡の厚さは明確である。

以上の点からみて、張掖郡域では幅広で敦煌郡域より少し厚手の、いわば「贅沢なつくり」の無稜「兩行」簡が一般的に作成・利用されており、有稜「兩行」簡はほとんど作成・利用されていなかったことは明らかである。一五ミリ以下の「兩行」がないわけではないが、そうした材料を利用するに際しても有稜化しない程度に、張掖郡域の無稜「兩行」簡への志向が強いということもできる。

(2) 簡牘形状の地域性とその要因についての仮説

それでは、上記のような差が何故生じたのか。張掖郡域の「兩行」簡の樹種情報がなく、また簡牘出土遺跡の正式な発掘報告書が非常に少ないこともあって、現時点では推測を多分に含む仮説とならざるを得ないが、その要因の検討を試みたい。

張掖郡域の簡牘出土遺跡は河西回廊の東西を結ぶ主要交通路から外れた居延地域にある一方、敦煌郡域は主要交通路と重なっている(地図)。このため両地域に業務の繁閑の差が生じ、主要交通路に沿った敦煌郡域では張掖(居



漢代河西回廊略図

註1 河川名は現在のもの、河道は前漢期のもの

註2 地図作成時の参考資料

- ・譚其驤『中国歴史地図集 第二冊 秦・西漢・東漢時期』中国地図出版社、1982年の33-34頁「涼州刺史部」
- ・国家文物局主編『中国文物地図集 内蒙古自治区分冊』上、西安地図出版社、2003年の277頁「額濟納旗文物図」
- ・国家文物局主編『中国文物地図集 甘肅分冊』上、測繪出版社、2011年の43頁「甘肅省地勢図」・195頁「敦煌市文物図」・197頁「金塔県文物図」

延)に比べ大量の簡牘を消費するため、入手しやすい紅柳の大量使用を必要とした結果、有稜「両行」簡が増加したという考え方はどうか。

交通に関わる官署として、性格が異なるが駅置である敦煌の懸泉置遺跡と関所である張掖(居延)の肩水金閔遺跡を比較する。懸泉置遺跡の出土簡は整理後の有字簡が約一八〇〇〇点とされる。肩水金閔遺跡出土簡は一九三〇年代出土分八五〇点、一九七〇年代出土分約一一〇〇〇点の合計一二〇〇〇点弱、懸泉置の三分の二弱程度の数量であるが、懸泉置の活動期間が前漢後半から後漢中期まで、⁽¹⁴⁾肩水金閔は前漢後半から後漢初代光武帝期で、⁽¹⁵⁾活動期間に数十年の差がある。官署としても、懸泉置には前五六〜前四六年の間は長吏であ

る丞が設置され、懸泉置と懸泉駅・懸泉廐・伝舎・厨も併設され、官吏は一〇名を超えたと推定される。肩水金閼遺跡は肩水金閼と東部候長治所・驛北亭が同居していた。⁽¹⁸⁾ 長吏はおらず官吏は六、七名と推定される。單純に肩水金閼遺跡の規模が小さく活動期間も短期間のため、出土簡牘量が少ないだけであろう。

以上のように、公文書は原則的に設置された官署数と配属官吏数によって増減するとみられる。居延は重要拠点として県の他、都尉府が二つ設置されて多数の戍卒が駐屯し、屯田や治水のための県級機構が所在していた。⁽¹⁹⁾ 実際の文書行政では、下行文書は中央政府や郡太守府から隸下各機関に区別なく下達されることも多く、それに対して回答（＝上行文書）を必要とすることもまた多い。『漢書』地理志に属県六・人口三八三三五とある敦煌郡と、属県一〇・人口八八七三二とある張掖郡とは、むしろ後者の方が業務量は多く、それに伴い居延地域での公文書も多くなる。⁽²⁰⁾ 敦煌郡も漢の直轄支配領域末端という点では居延地域と大差なく、当時の文書行政の状況から、西域との通関行政を考慮しても、簡牘の材質に影響するほど居延地域との業務の差が生じたとは考えにくい。

② 自然環境要因の可能性

そこで、張掖郡域の「兩行」簡の「贅沢なつくり」は手がかりになるのではないか。すなわち、居延地域を含む張掖郡域では幅広の簡牘を作成するための材料が敦煌郡域より入手しやすく、張掖郡域の官署全体として無稜「兩行」簡が大半を占めたということである。

簡牘の材料入手については、エノリギレ氏により、居延・敦煌一帯の簡牘は大部分が当地の木材（紅柳・胡楊）で作られており、辺境防衛機構に属する戍卒らの作業内容として簡牘に記載される「伐木」「削工」があると指摘さ

れている⁽²¹⁾。ただし、敦煌懸泉漢簡無稜「兩行」簡の材質の半数近くは胡楊ではなく「松」であり、これらは敦煌・居延地域の簡牘出土遺跡付近ではほとんど自生していないと考えられる。従って、何らかの手段で他地域から松を入手する必要がある。その手段の候補の一つが購入となる。

簡牘の価格を示した事例として知られる簡牘が以下である。⁽²²⁾

尉史竝白

教問木大小賈謹問木大四韋長三丈韋七十長二丈五尺韋五十五●三韋木長三丈枚百六十椽木長三丈枚百長

二丈五尺枚八十母椽槩

(尉史并申し上げます。お申し付けに木の大小の価格のご質問があり、謹んで問い合わせたところ、四韋で長さ三丈のものは韋ごとに七〇、長さ二丈五尺のものは韋ごとに五五。●三韋の木で長さ三丈のもの一つ一六〇、椽木は長さ三丈で一つ一〇〇、長さ二丈五尺で一つ八〇、椽・槩はありません)

一九七〇年代居延漢簡 EPT65.120 (A8)

このような事例から、簡牘またはその材料の購入が行われていたことは疑いない。だがそうだとすると、松はどこから居延の甲渠候官や敦煌懸泉置まで運ばれたのか。松の候補である「青海雲杉」*Picea crassifolia* は、海拔一六〇〇～三八〇〇メートルの山地に生育し、谷間や日陰斜面で単純林を形成する⁽²³⁾。黒河上流域の調査では、針葉樹林は標高二四〇〇～三一〇〇メートルに限られるという⁽²⁴⁾。そこで張掖郡域では南の山地を入手地とし、後述のように水運を仮定し、漢代張掖郡治所在地とされる張掖市黒水国北城遺跡⁽²⁵⁾から南西の、祁連山脈から黒河が流れ出る地点を

木材の運搬開始地点とすると(地図上①)、直線距離で甲渠侯官まで約三四〇キロ、饒得県から黒河沿いの経路とすれば約四四〇キロとなる。

一方敦煌郡域でも南に祁連山脈が連なっているが、Google Earthなどで確認する限り、樹林などは酒泉以西ではあまり見受けられず、また祁連山脈の標高も先ほどの生育に適した高度より高い所が増える。⁽²⁶⁾『史記索隱』所引『西河旧事』には祁連山について、

山は張掖・酒泉二界の上に在り、東西二百餘里、南北百里、松柏五木有り、水草美しく、冬は温かく夏は涼しく、畜牧に宜し。⁽²⁷⁾

との記載があり、張掖・酒泉付近の祁連山脈の豊かさを示す一方、『漢書』匈奴伝下に河西四郡成立後も張掖郡付近に匈奴の突出部があつて、前漢末でもその山に匈奴の西辺諸侯が木材の供給を頼っていたとの史料もある。⁽²⁹⁾

匈奴に漢に斗入する地有り、張掖郡に直り、奇材木・箭竿・就羽を生し、如し之を得れば、邊に於いては甚だ饒にして、國家に地を廣げるの實有り。⁽³⁰⁾

匈奴西邊諸侯は穹廬及び車を作るに、皆此の山に材木を仰ぐ。⁽³¹⁾

当時は祁連山脈のほとんどが漢の管制下にあり、仮に敦煌付近に森林があつても匈奴の自由にならず、張掖近辺の山地の木材に依存せざるを得なかつたのであろうが、漢がこの山地に目を付けて讓渡を持ちかけたことから、酒泉以西の祁連山脈では大量の木材入手は見込めなかつた可能性はあろう。そこで嘉峪関市南西の北大河が祁連山脈から流れ出る地点を木材の運搬開始地点と仮定すると(地図上②)、敦煌懸泉置までは三二〇キロ以上、一度敦煌郡府

まで運ぶとすれば六〇キロを加え三八〇キロ、採算が合わないように思われる。

百里（約四〇キロ）に樵を販らず。

『史記』貨殖列伝⁽³²⁾

この例は燃料にするための木材の話だが、消耗品という点で、簡牘に利用される木材も同様であろう。仮に労役などによる伐採運搬を実施したにしても、費用・労力の大きさは否めない。

ただし居延では、弱水（黒河）を利用した水運がある程度可能となる。⁽³³⁾ 伐採した木材を河川で運搬することは、漢代でも行われていた。

臣の前部の土山に入り、材木大小六萬餘枚を伐り、皆水次に在り……中略……氷解ければ漕ぎて下し、郷亭を繕い、溝渠を浚い、湟陘以西の道橋七十所を治し、鮮水の左右に至るを可とせしむ。『漢書』趙充国伝⁽³⁴⁾

とすれば、居延は祁連山脈から極めて遠隔地にみえるものの、実際には祁連山脈産木材の入手事情は悪くなかったと考えられる。また原材料や完成品として送られてこないまでも、郡治の饒得県をはじめ祁連山脈に近い張掖郡域の官署で松の無稜「兩行」簡が大量に作成・利用されていけば、同一郡内ということで公文書として居延まで流入する松の無稜「兩行」簡も増え、再利用などされるものも増加する。このような状況下、張掖郡の官署では、材質に関わらず有稜「兩行」簡の作成・使用がほとんどなされなくなっていたのではないか。

一方、敦煌郡域では、松が入手困難とまではいえなかったことは、無稜「兩行」簡の半数を松製が占めることもわかる。敦煌郡域を流れる疏勒河（昌馬河）は酒泉より西方に位置し、漢代では「冥沢」という湖を形成していたようである。その上流部は酒泉郡の南の祁連山脈に達するものの、漢の河西南方防衛線を越え羌の勢力圏へ入り

込み、⁽³⁵⁾標高や降水量などの自然条件も森林が存在できる条件を満たさない地域が増える。であれば張掖郡域に比べ松の供給量は少なく、建材などへの利用が優先されれば簡牘へ利用できる量も少なくなる。敦煌懸泉漢簡「兩行」簡の中で有稜簡が半数を占め、その中でも紅柳が圧倒的な数量であることからみて、敦煌郡域では、現地ですべての紅柳を有効かつ便利に使うため有稜化がされた。そうした工夫が継続されると、松であつても有稜化されやすくなった、と考えられる。ただし「兩行」簡の半数以上が無稜で作成され、その多くが松製であつた。

最後に、胡楊についても言及しておく。胡楊は河西で入手しやすいはずだが、懸泉漢簡による限り「兩行」簡全体の二割弱を占めるにとどまり、松の方が多し。このことについて、敦煌馬圈湾遺跡の木器の材質が参考になる。馬圈湾遺跡では木器五〇点の出土が報告され、材質が示されたものは二五件、うち一八件を胡楊が占める。⁽³⁶⁾また、玉門関遺跡では木器一件中、胡楊四件と白楊（胡楊の近縁種）四件で八件を占める。⁽³⁷⁾敦煌でも最も西端の二遺跡の情報だけで断定はできないが、胡楊は紅柳に比べれば大きく成長するので、河西の乾燥地では現地で得られる木材として建材や木器など一定程度の大きさを要するものに優先的に利用され、簡牘、特により多くの木材を要する幅広の簡牘製作へ廻される量は多くなつたのではないか。この推測が正しければ、現時点で敦煌地域では松製簡牘が胡楊製簡牘より多かつた事実は、敦煌地域へは大きなままの材木ではなく簡牘ないし簡牘へ加工しやすい状態で流入した松が少なくなつて、場合によっては他地域からもたらされた松製簡牘の積極的再利用を想定すべきことを示唆しよう。

おわりに

以上、前漢後半期の河西地域における敦煌漢簡と居延漢簡の「兩行」簡を比較し、同一用途の簡牘の形態の違いの存在と、その要因について述べてきた。五一広場漢簡などの状況から、前漢後半期以降、木の「兩行」簡は平坦でやや幅広な簡牘として作成されることが一般的で、張掖郡域においてもそれは変わらなかったが、敦煌郡域では平坦な「兩行」簡に加え、全「兩行」簡の半数近くを有稜「兩行」簡が占めていた。有稜「兩行」簡は張掖郡域ではほぼみられず、現時点では敦煌郡域特有の簡牘と考えられ、元々は細い紅柳の枝を有効に利用するため、有稜化加工を施したものと考えられるが、実際には樹種とは関係なく有稜化加工を施すようになったとみられる。

そのような簡牘が敦煌郡で利用された要因について、現時点ではサンプル数などの問題から仮説の構築を試みた結果、敦煌では幅広の簡牘に利用できる木材が潤沢に供給される環境になく、細い紅柳の枝を多用していたことが要因と推測された。一方、張掖郡域では、敦煌に比べ木材が入手しやすく、そのため樹種に関わらず平坦な無稜「兩行」簡が作成・利用されたのではないか。この推測が正しければ、官署による同一機能の簡牘形状の違いが、官署所在地域の自然環境に影響された一例とみなすことが許されよう。また如上の点から、河西地域では簡牘の材料は郡の境を越えて大量に移送されることは多くなかったと考えられ、辺郡の物流を考えるための一つの材料をも提供できたと考ええる。

現時点では仮説にとどまった部分も多く、居延漢簡における樹種情報として紅柳の利用についてももう少し比較検

討を実施できれば、さらに議論が深まる。台湾中央研究院所蔵居延漢簡などの調査の機会を得て、さらなる精度向上を爾後の課題としたい。

註

- (1) 例として榎山明「刻齒簡牘初探——漢簡形態論のために——」・魏晋楼蘭簡の形態——封検を中心として——」(同「秦漢出土文字史料の研究——形態・制度・社会——」第一部第一章・第一部第二章、創文社、二〇一五年「初出一九九五・二〇〇一」)が挙げられる。
- (2) 拙稿「中国古代簡牘の分類について」(拙著『秦漢簡牘史料研究』付編第三章、汲古書院、二〇一五年「初出二〇一一」)。
- (3) 本稿では、「敦煌漢簡」を、漢代敦煌郡域で発見された漢代簡牘の総称として用い、個別の史料群を指す場合には、敦煌懸泉漢簡、敦煌馬圈灣漢簡などと呼称する。また同じく「居延漢簡」を張掖郡域の居延・肩水兩地域で発見された漢代簡牘の総称として用い、個別の史料群を指す場合には、肩水漢簡、地灣漢簡などと呼称する。
- (4) 角谷常子「簡牘の形状における意味」(富谷至編「辺境出土木簡の研究」朋友書店、二〇〇三年)。
- (5) 「記」については、鶴飼昌男「漢代の文書についての考察——『記』という文書の存在——」(『史泉』六八、一九八八年)、拙稿「漢代文書行政における書信の位置付け」(前掲註(2))拙著第一章、汲古書院、二〇一五年「初出二〇〇九」)参照。
- (6) 後掲の玉門閼漢簡テキストでは、一九九八年に玉門閼遺跡で出土した簡牘以外に、懸泉置遺跡をはじめ敦煌郡域で採集された簡牘が含まれているが、「玉門閼漢簡」として一括した。ただし、明らかに漢代ではない史料については除外した。
- (7) 多角柱簡牘を模して楸として利用した簡牘の存在については、前掲註(4)角谷論考(一一五頁)で指摘されている。
- (8) テキストに明記はないが、甘肅省文物考古研究所編「敦煌馬圈灣漢代烽燧遺址発掘報告」(同編「敦煌漢簡」中華書局、一九九一年)六七頁によれば、胡楊は *Populus euphratica* (ポプラ)、紅柳は *Tamarix ramosissima* (タマリスク)、松は

Picea neweitchii (トウヒ) とされる。松は、現在の祁連山脈での主要樹木「青海雲杉」*Picea crassifolia* も考えられる。井上充幸「明清時代の黒河上流域における山林の開発と環境への影響」『東アジア文化交渉研究』三、二〇一〇年) 四七八頁註(10)。

(9) フフバートル「現代中国史にみるエズネーの水と牧畜業——地下水依存牧畜業の始まり、一九五七―六五を中心に——」(井上充幸・加藤雄三・森谷一樹「オアシス地域史論叢——黒河流域二〇〇〇年の点描——」)の二二八頁、前掲註(8)井上論考参照。

(10) 例えば筆者が実見したものは、10.9(A33)・1833(A33)・236.1(A33)・258.25(A8)・275.29(A10)・427.1(P1)などがあげられる。榎山明・佐藤信編『文献と遺物の境界Ⅱ——中国出土簡牘史料の生態的研究——』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、二〇一四年)第一部図版編参照。

(11) 例えば写真からの判別ではあるが、190DXT0110①:10(紅柳)・011②:26(紅柳)の裏面には木芯の、また190DXT011②:21(紅柳)には節の痕跡がみられる。

(12) 陶安あんど「書写材料とモノの狭間——日本木簡学との比較を通じてみた中国簡牘学のジレンマ——」(榎山明・

佐藤信編『文献と遺物の境界——中国出土簡牘史料の生態的研究——』六一書房、二〇一一年)の註(16)参照。

(13) 長沙五一広場漢簡の写真については、長沙市文物考古研究所・清華大学出土文献研究と保護中心・中国文化遺産研究院・湖南大学岳麓書院編『長沙五一広場東漢簡牘』(中西書局、壹と貳二〇一八・参と肆二〇一九・伍と陸二〇二〇年)を参照。

(14) 郝樹声・張徳芳『懸泉漢簡研究』(甘肅文化出版社、二〇〇九年)の第二章「紀年与时称」によると、前八五(五)ろから後漢期の一〇七(七)ろまでは活動していた。

(15) 郭偉壽「漢代肩水金閔吏編年及相關問題」(『出土文献』一〇、二〇一七年)によると、遅くとも前八〇年設置、早くとも王莽期の一〇九年までは活動していた。

(16) 張俊民「懸泉漢簡・置丞・簡与漢代郵伝管理制度的演變」(同氏『簡牘学論稿——聚沙篇』甘肅教育出版社、二〇一四年「初出二〇〇八」)。

(17) 前掲註(14)郝樹声・張徳芳著書第一章「懸泉漢簡与懸泉置」参照。

(18) 青木俊介「漢代肩水地区A三二所在機関とその業務関係——肩水金閔と肩水東部を中心に——」(高村武幸編『周縁領域からみた秦漢帝国』六一書房、二〇一七年)。

- (19) 榎山明「漢代エチナ・オアシスにおける開発と防衛線の展開」(同氏「秦漢出土文字史料の研究——形態・制度・社会——」第三部第八章、創文社、二〇一五年)「初出二〇〇二」参照。
- (20) 遺跡の規模としても、敦煌玉門関遺跡を居延地区の都尉府遺跡、例えば肩水金閼付近のA三五肩水都尉府遺跡(約一四〇×一九〇メートル四方)と比較するとむしろやや小さく(一二〇×一一〇メートル)、居延地区より多数の官吏を擁し簡牘消費量が多かったとは考え難い。遺跡規模の比較については、片野竜太郎「漢代辺郡の都尉府と防衛線——長城防衛線遺構の基礎的研究——」(榎山明・佐藤信編「文献と遺物の境界——中国出土簡牘史料の生態的研究——」六一書房、二〇一一年所収)参照。
- (21) 紀安諾(エノ・ギール)「漢代辺塞備用書写材料及共社会意義」(「簡帛」二、二〇〇七年)、特に四七六頁。
- (22) この簡の解釈は、仲山茂「漢代における長吏と属吏のあいだ——文書制度の観点から——」(「日本秦漢史学会会報」三、二〇〇二年)参照。
- (23) 中国科学院中国植物志編輯委員会編「中国植物志」第七卷(科学出版社、一九七八年)の一三七・一三八頁参照。
- (24) 尾崎孝宏「黒河上流域民族学調査報告」(「オアシス地域研究会報」四—一、二〇〇四年)、一〇頁。なお本論考は森谷一樹氏のご厚意で入手できた。記して謝意を表する。
- (25) 黒水国北城遺跡については、呉正科「絲路古城黒水国」(甘肅人民出版社、二〇〇八年)特に五九〜八〇頁の「張国臂掖」、拙稿「黒水国北城遺跡」(高村武幸・廣瀬薫雄・渡邊英幸編「周縁領域からみた秦漢帝国」二、六一書房、二〇一九年)。ただし、甘肅省文物考古研究所編著、陳国科・楊誼時・劉兵兵主編「張掖甘州黒水国漢代墓葬発掘報告」(甘肅教育出版社、二〇一九年)では、この遺跡の城壁の年代上限は魏晋期とされる。同書・呉氏の指摘では付近に漢代建築遺跡があり(大体北城遺跡から大体西南西に三キロ)、同書によれば二〇一六年の探査で複数の建築遺跡が確認された(九・一〇頁)。北城遺跡が漢代張掖郡治でないとしても、この付近に存在したと仮定できる。
- (26) 朱耀宝・寇德榮「甘肅省第二次全国重点保護野生植物資源調査」(中国林业出版社、二〇二〇年)によると、祁連山地は東からの暖湿気流の微弱な影響で、東部は湿潤で西部は乾燥しており、東部は森林の被覆が良好、西部は草原や荒漠草原となる。また気候区分としても、祁連山脈が含まれる植被の良好な河西南部高寒半干旱区の範囲として、東から金昌・武威・張掖・酒泉南部とあり、それ以西を含

めていない(五二～五三頁)。

(27) 山在張掖・酒泉二界上、東西二百餘里、南北百里、有松柏五木、美水草、冬溫夏涼、宜畜牧。

(28) 『河西旧事』は撰者不詳で、『河西旧事』『西河故事』『河西故事』とも称され、その佚文を集めて検討した屈直敏『『西河旧事』考略』(『敦煌学輯刊』二〇一九年第三期)によれば、成書年代は三五一年以降五三二年以前とみられ、東晋期と考えられる。漢代の状況を考慮するにあたって参考とすることが許されよう。

(29) 河西回廊の樹木資源に関する典籍文献史料については、前田正名「六世紀以前における河西の産業について」(『駒沢史学』三二、一九八四年)・李并成『河西走廊歴史時期沙漠化研究』(科学出版社、二〇〇三年)の第四章第四節「祁連山水源涵養区植被的破壊与演变」を参照。典籍文献史料では、おおむね酒泉郡南方付近までの祁連山脈に樹木が多いということが示されるが、酒泉以西についての森林の記載はみられない。

(30) 匈奴有斗入漢地、直張掖郡、生奇材木箭竿就羽、如得之、於邊甚饒、國家有廣地之實。

(31) 匈奴西邊諸侯作穹廬及車、皆仰此山材木。

(32) 百里不販樵。

地域・官署による簡牘形状の違い 高村

(33) 前掲註(8) 井上論考によれば、明末清初には黒河の水運で祁連山から切り出された木材が張掖(甘州)まで運搬され、一四世紀にはカラホトまで運ばれた可能性を指摘する(四七九頁)。カラホトは、漢代の居延地域である。

(34) 臣前部士入山、伐材木大小六萬餘枚、皆在水次……中略……冰解漕下、繕鄉亭、浚溝渠、治湟陜以西道橋七十所、令可至鮮水左右。

(35) 河西四郡の南方防衛線については不明点が多いが、中国の烽燧遺跡の分布などを示した先行研究によりつつ敦煌南方の状況を検討した片野竜太郎「懸泉置と敦煌郡南辺の防衛線——漢代敦煌郡周辺遺構の基礎的研究」(『日本秦漢史研究』一二、二〇一四年)の示す敦煌郡南辺の烽燧の状況から、敦煌郡では祁連山南麓の一部までは管制下においていたと推測できる。同論文には懸泉漢簡に散見する羌との紛争が紹介されており、『漢書』趙充国伝にも記されるように、羌との関係は安定していたわけではない。他、李正宇「敦煌郡的辺塞長城及烽警系統」(『敦煌研究』一九九五一年第二期)参照。

(36) 前掲註(8) 甘肅省文物考古研究所編「敦煌馬圈灣漢代烽燧遺址発掘報告」参照。

(37) 張徳芳・石明秀主編・敦煌市博物館・甘肅簡牘博物館・

二二三

陝西師範大学人文社会科学高等研究院編『玉門閔漢簡』(中西書局、二〇一九年)。

※本稿利用の簡牘史料テキストは以下の通り(五十音順)。

肩水金閔漢簡……甘肅簡牘保護研究中心・甘肅省文物考古研究所・甘肅省博物館・中国文化遺產研究院古文獻研究室・中国社会科学院簡帛研究中心編『肩水金閔漢簡』中西書局、
壹二〇一一年・貳二〇一二年・參二〇一三年・肆二〇一五年・伍二〇一六年

一九三〇年代出土居延漢簡……簡牘整理小組『居延漢簡』中央研究院歷史語言研究所專刊之一〇九、壹二〇一四年・貳二〇一五年・參二〇一六年・肆二〇一七年

一九七〇年代出土居延漢簡……孫占宇・楊眉・李迎春・馬智全・肖從礼・張德芳・韓華『居延新簡集積』一〜七、甘肅文化出版社、二〇一六年

地灣漢簡……甘肅簡牘博物館・甘肅省文物考古研究所・出土文獻与中国古代文明研究協同創新中心中国人民大学分中心編『地灣漢簡』中西書局、二〇一七年

敦煌玉門閔漢簡……張德芳・石明秀主編 敦煌市博物館・甘肅簡牘博物館・陝西師範大学人文社会科学高等研究院編『玉門閔漢簡』中西書局、二〇一九年

敦煌懸泉漢簡……甘肅簡牘博物館・甘肅省文物考古研究所・陝西師範大学人文社会科学高等研究院・清華大学出土文獻研究与保護中心編『懸泉漢簡』中西書局、壹二〇一九年・
貳二〇二〇年

敦煌馬圈灣漢簡……張德芳『敦煌馬圈灣漢簡集積』甘肅文化出版社、二〇一三年

(明治大学文学部教授)

一覽表1-1 懸泉漢簡「面行」簡一覽表

| 簡番号 | 字 | 檢 | 幅・厚 | 種別 | 樹種 | 簡番号 | 字 | 檢 | 幅・厚 | 種別 | 樹種 | 簡番号 | 字 | 檢 | 幅・厚 | 種別 | 樹種 |
|-----------|---|---|--------|----|----|-----------|---|---|------|----|----|----------|---|---|----------|----|----|
| 0109②:10 | 崩 | 無 | 31・5 | 不明 | 紀柳 | 0111①:6 | 謹 | 有 | 9・2 | 上? | 紀柳 | 014③:49 | 謹 | 無 | 20・4 | 上 | 松 |
| 0109②:16 | 謹 | 無 | 23・2.5 | 上 | 松 | 0111②:3 | 崩 | 有 | 8・3 | 下 | 紀柳 | 014③:140 | 謹 | 有 | 20・3 | 下 | 紀柳 |
| 0109②:28 | 謹 | 無 | 25・2 | 上? | 松 | 0111②:21 | 謹 | 有 | 20・4 | 下 | 紀柳 | 014③:143 | 謹 | 有 | 14・4 | 下 | 紀柳 |
| 0109②:33 | 崩 | 無 | 10・2 | 伝 | 紀柳 | 0111②:26 | 崩 | 有 | 11・3 | 下 | 紀柳 | 014③:144 | 謹 | 無 | 10・2 | 平 | 紀柳 |
| 0109②:51 | 崩 | 無 | 11・2.5 | 伝 | 松 | 0111②:27 | 崩 | 有 | 12・3 | 下 | 紀柳 | 016②:4 | 謹 | 有 | 7・3 | 下 | 紀柳 |
| 0109②:74 | 謹 | 有 | 15・4 | 下 | 紀柳 | 0111②:31 | 崩 | 無 | 21・2 | 伝 | 松 | 016②:43 | 謹 | 有 | 11・3 | 下 | 紀柳 |
| 0109③:14 | 謹 | 有 | 7・1.4 | 下 | 胡楊 | 0111②:73 | 崩 | 無 | 20・2 | 伝 | 松 | 016②:52 | 謹 | 有 | 6・3 | 下 | 紀柳 |
| 0109③:19 | 謹 | 無 | 8・2 | 不明 | 胡楊 | 0111②:84 | 崩 | 無 | 19・4 | 伝 | 紀柳 | 016②:53 | 謹 | 有 | 9・3 | 下 | 紀柳 |
| 0109S:29 | 謹 | 無 | 26・3 | 下 | 松 | 0112②:7 | 崩 | 無 | 25・3 | 上 | 松 | 016②:54 | 崩 | 有 | 7.5・3 | 下 | 紀柳 |
| 0109S:63 | 崩 | 有 | 20・6 | 不明 | 紀柳 | 0112②:18 | 謹 | 無 | 18・2 | 上 | 松 | 016②:89 | 謹 | 有 | 9・2 | 下 | 紀柳 |
| 0109S:183 | 謹 | 有 | 13・3 | 下 | 紀柳 | 0112②:84 | 謹 | 無 | 15・4 | 上 | 紀柳 | 016②:107 | 謹 | 無 | 14.5・1.5 | 伝 | 紀柳 |
| 0110①:3 | 崩 | 有 | 15・5 | 不明 | 紀柳 | 0112③:1 | 崩 | 有 | 26・6 | 下? | 紀柳 | 016②:122 | 崩 | 有 | 7.5・2 | 不明 | 紀柳 |
| 0110①:5 | 崩 | 無 | 13・3 | 伝 | 胡楊 | 0112③:5 | 謹 | 無 | 15・6 | 上 | 紀柳 | 016②:152 | 謹 | 無 | 15・2.5 | 下 | 紀柳 |
| 0110①:10 | 崩 | 有 | 13・4 | 平 | 紀柳 | 0112③:131 | 謹 | 無 | 15・2 | 上 | 紀柳 | 016②:155 | 崩 | 無 | 17・2 | 不明 | 松 |
| 0110①:22 | 謹 | 有 | 12・4 | 下 | 紀柳 | 0112④:9 | 謹 | 有 | 15・3 | 不明 | 紀柳 | 016S:10 | 崩 | 無 | 25・2.5 | 伝 | 胡楊 |
| 0110①:81 | 謹 | 無 | 28・3 | 上 | 松 | 014①:1 | 崩 | 有 | 25・5 | 下 | 胡楊 | 016S:38 | 崩 | 無 | 13・3 | 不明 | 紀柳 |
| 0110①:91 | 謹 | 無 | 20・5 | 平 | 松 | 014①:50 | 崩 | 無 | 8・2 | 伝 | 紀柳 | 0205②:20 | 謹 | 有 | 10・4 | 上 | 紀柳 |
| 0110①:102 | 謹 | 有 | 10・5 | 下 | 紀柳 | 014①:109 | 謹 | 無 | 17・2 | 上 | 松 | 0206②:11 | 崩 | 有 | 7・3 | 平 | 紀柳 |
| 0110②:11 | 謹 | 無 | 14・3 | 下 | 松 | 014①:130 | 崩 | 無 | 18・2 | 下? | 松 | 0207②:16 | 崩 | 無 | 9・2.5 | 下 | 松 |
| 0110②:14 | 崩 | 有 | 20・7 | 下 | 胡楊 | 014①:131 | 崩 | 無 | 16・2 | 伝 | 松 | 0207④:5 | 謹 | 無 | 18・3 | 伝 | 胡楊 |
| 0110②:15 | 謹 | 有 | 13・3 | 下 | 紀柳 | 014①:212 | 謹 | 無 | 20・4 | 上 | 松 | 0208②:10 | 謹 | 無 | 9・3 | 上 | 松 |
| 0110②:25 | 謹 | 有 | 19・4 | 上 | 紀柳 | 014②:15 | 謹 | 有 | 14・5 | 下? | 紀柳 | 0208③:2 | 謹 | 無 | 20・2 | 下 | 紀柳 |
| 0110③:8 | 謹 | 有 | 17・6 | 下 | 紀柳 | 014③:21 | 謹 | 有 | 20・6 | 上 | 紀柳 | 0209③:26 | 謹 | 有 | 21・6 | 不明 | 紀柳 |
| 0110③:12 | 崩 | 有 | 16・7 | 上 | 胡楊 | 014③:25 | 謹 | 有 | 17・5 | 平 | 紀柳 | 0209⑤:1 | 崩 | 無 | 19・2 | 上 | 松 |
| 0110③:16 | 崩 | 無 | 20・3 | 上 | 胡楊 | 014③:26 | 謹 | 有 | 15・5 | 下 | 紀柳 | 0209⑤:19 | 謹 | 無 | 16.5・2.5 | 下 | 紀柳 |
| 0110④:4 | 謹 | 有 | 14・6 | 下 | 松 | 0114③:39 | 謹 | 無 | 22・2 | 上 | 紀柳 | 0209S:3 | 崩 | 有 | 20・4 | 下 | 紀柳 |

地域・官署による簡牘形状の違い 高村

| 簡番号 | 字 | 稜 | 幅・厚 | 種別 | 樹種 | 簡番号 | 字 | 稜 | 幅・厚 | 種別 | 樹種 | 簡番号 | 字 | 稜 | 幅・厚 | 種別 | 樹種 |
|-----------|---|---|---------|----|----|-----------|---|---|--------|----|----|-----------|---|---|--------|----|----|
| 0209S:43 | 謹 | 無 | 23・3 | 伝 | 松 | 0309③:89 | 謹 | 無 | 15・3 | 下 | 松 | 0309③:276 | 謹 | 有 | 17・7 | 上 | 松 |
| 0209S:68 | 謹 | 有 | 18・4 | 下 | 紅柳 | 0309③:90 | 謹 | 無 | 15・3 | 下 | 松 | 0309③:277 | 謹 | 有 | 13・3 | 上 | 松 |
| 0209S:104 | 謹 | 有 | 14・6 | 下 | 紅柳 | 0309③:93 | 謹 | 無 | 16・1.5 | 伝 | 松 | 0309③:280 | 謹 | 有 | 14・1.2 | 下 | 胡楊 |
| 0210①:11 | 崩 | 有 | 11.5・6 | 不明 | 紅柳 | 0309③:94 | 謹 | 無 | 14・1.8 | 下 | 胡楊 | 0309③:294 | ? | 有 | 13・2.5 | 下 | 胡楊 |
| 0210①:15 | 謹 | 無 | 17.5・3 | 上 | 紅柳 | 0309③:112 | 崩 | 無 | 16・1.5 | 伝 | 胡楊 | 0309③:296 | ? | 有 | 11.5・3 | 上 | 松 |
| 0210①:16 | 謹 | 有 | 18・14.5 | 上 | 紅柳 | 0309③:115 | 謹 | 無 | 14・1.5 | 上 | 胡楊 | 0309③:314 | 謹 | 無 | 21.5・2 | 下 | 松 |
| 0210①:19 | 崩 | 有 | 10・4.5 | 上 | 紅柳 | 0309③:127 | 謹 | 無 | 14・2 | 下 | 胡楊 | 0309③:320 | 謹 | 無 | 13・1.5 | 不明 | 胡楊 |
| 0210①:22 | 崩 | 有 | 15・3.5 | 下 | 紅柳 | 0309③:128 | 謹 | 有 | 14・3 | 上 | 紅柳 | 0402④A:8 | 崩 | 無 | 21・3 | 上 | 胡楊 |
| 0210①:54 | 謹 | 有 | 16・7 | 下 | 紅柳 | 0309③:130 | 謹 | 無 | 15・2 | 不明 | 紅柳 | 0403④A:2 | ? | 有 | 20・3 | 不明 | 松 |
| 0210①:61 | 崩 | 無 | 21・2 | 伝 | 松 | 0309③:131 | 崩 | 有 | 13・3 | 下 | 胡楊 | 0405④A:12 | 崩 | 無 | 16・2 | 伝 | 胡楊 |
| 0210①:63 | 崩 | 無 | 10.5・2 | 伝 | 紅柳 | 0309③:136 | 謹 | 無 | 16・3.5 | 下 | 胡楊 | 0111①:6 | 崩 | 無 | 14・3 | 不明 | 紅柳 |
| 0210①:64 | 崩 | 有 | 14・6.5 | 上 | 胡楊 | 0309③:149 | 謹 | 無 | 14・2.5 | 上 | 松 | 0111①:41 | 謹 | 無 | 26・3 | 不明 | 松 |
| 0210①:65 | ? | 無 | 19・3 | 平? | 紅柳 | 0309③:152 | 謹 | 有 | 16・4 | 下 | 胡楊 | 0111①:214 | 崩 | 無 | 22・4 | 下 | 紅柳 |
| 0210①:85 | 謹 | 無 | 12・1.5 | 上 | 胡楊 | 0309③:165 | 謹 | 無 | 15・2 | 下 | 紅柳 | 0111①:217 | 崩 | 無 | 14・2.5 | 上 | 紅柳 |
| 0210①:86 | 謹 | 無 | 17・2 | 伝 | 紅柳 | 0309③:176 | 崩 | 無 | 15・3 | 上 | 紅柳 | 0111①:221 | 謹 | 有 | 16・4 | 不明 | 紅柳 |
| 0210③:7 | 謹 | 有 | 16・6 | 不明 | 紅柳 | 0309③:193 | 崩 | 無 | 13・3 | 伝 | 紅柳 | 0111①:223 | 崩 | 有 | 14・4 | 不明 | 紅柳 |
| 0210④:12 | 謹 | 有 | 8・5 | 下 | 紅柳 | 0309③:205 | 崩 | 無 | 18・3 | 下 | 胡楊 | 0111①:224 | 崩 | 有 | 13・6 | 不明 | 紅柳 |
| 0210④:14 | 謹 | 有 | 7・4 | 下 | 胡楊 | 0309③:210 | 謹 | 無 | 17・2 | 上 | 胡楊 | 0111①:225 | 崩 | 有 | 12・5 | 不明 | 紅柳 |
| 0309③:4 | 謹 | 無 | 15・2 | 不明 | 松 | 0309③:215 | 崩 | 無 | 15・1.5 | 上 | 胡楊 | 0111①:278 | 崩 | 無 | 19・3 | 伝 | 松 |
| 0309③:5 | 謹 | 無 | 16・7 | 下 | 松 | 0309③:221 | 謹 | 有 | 15・4 | 下 | 胡楊 | 0111①:304 | 謹 | 無 | 17・2 | 上 | 松 |
| 0309③:9 | 謹 | 無 | 12・2 | 上 | 松 | 0309③:222 | 謹 | 有 | 12・4 | 下 | 胡楊 | 0111①:306 | 謹 | 無 | 20・4 | 不明 | 松 |
| 0309③:14 | 謹 | 有 | 16・7 | 下 | 松 | 0309③:223 | 謹 | 有 | 13・3 | 下 | 胡楊 | 0111①:311 | 謹 | 有 | 16・5 | 下 | 紅柳 |
| 0309③:18 | 謹 | 無 | 10・3 | 下 | 紅柳 | 0309③:226 | 謹 | 有 | 16・5 | 下 | 胡楊 | 0111①:312 | 謹 | 有 | 16・4 | 下 | 紅柳 |
| 0309③:22 | 謹 | 無 | 22・10 | 伝 | 松 | 0309③:227 | 謹 | 有 | 13・4.5 | 上 | 胡楊 | 0111①:313 | 崩 | 有 | 15・5.5 | 下 | 紅柳 |
| 0309③:51 | 謹 | 無 | 8.5・1.5 | 上 | 松 | 0309③:236 | 謹 | 有 | 17・4 | 下 | 胡楊 | 0111①:318 | 謹 | 無 | 25・3 | 上 | 松 |
| 0309③:69 | 謹 | 無 | 13・2 | 上 | 松 | 0309③:257 | 謹 | 有 | 13・4 | 不明 | 胡楊 | 0111①:320 | 謹 | 有 | 13・4 | 下 | 紅柳 |
| 0309③:87 | 謹 | 無 | 18・3 | 下 | 松 | 0309③:259 | 謹 | 無 | 14・2 | 上 | 胡楊 | 0111②:9 | 謹 | 無 | 24・3.5 | 上 | 松 |
| 0309③:88 | 謹 | 無 | 16・2 | 下 | 松 | 0309③:275 | 謹 | 有 | 14・5 | 上 | 松 | | | | | | |

| 簡番号 | 字 | 後 | 幅・厚 | 種別 | 樹種 | 簡番号 | 字 | 後 | 幅・厚 | 種別 | 樹種 |
|-----------|---|---|--------|----|----|-----------|---|---|--------|----|----|
| | | | | | | | | | | | |
| 0111②:38+ | 謹 | 無 | 23・3 | 上 | 松 | 0112③:19 | 謹 | 無 | 16・3 | 上 | 紅柳 |
| 0112③:62 | 謹 | 無 | 26・3 | 下 | 松 | 0112③:36 | 謹 | 無 | 14・3 | 下 | 紅柳 |
| 0111②:72 | 謹 | 無 | 26・3 | 下 | 松 | 0112③:40 | ? | 有 | 14・3 | 下 | 紅柳 |
| 0111②:118 | 謹 | 有 | 15・5 | 上 | 紅柳 | 0112③:47 | 謹 | 有 | 21・5 | 上 | 紅柳 |
| 0111②:119 | 崩 | 無 | 12・2.5 | 伝 | 紅柳 | 0112③:71 | 謹 | 無 | 25・3 | 下 | 胡楊 |
| 0111②:137 | 崩 | 無 | 17・2.5 | 伝 | 松 | 0112③:78 | 崩 | 無 | 12.5・2 | 伝 | 紅柳 |
| 0111②:146 | 謹 | 有 | 16・4 | 不明 | 紅柳 | 0112③:83 | 崩 | 無 | 20・3 | 不明 | 胡楊 |
| 0111②:150 | 謹 | 有 | 18・5 | 下 | 松 | 0112③:97 | 崩 | 無 | 12.5・2 | 伝 | 松 |
| 0111②:177 | 崩 | 無 | 16・2 | 伝 | 松 | 0112③:105 | 謹 | 有 | 20・3 | 下 | 紅柳 |
| 0111②:198 | ? | 有 | 15・3 | 平 | 紅柳 | 0112③:108 | 崩 | 無 | 10・2.5 | 伝 | 松 |
| 0111③:7 | 崩 | 無 | 14・3 | 上 | 紅柳 | 0112③:112 | 謹 | 有 | 19.5・3 | 上 | 松 |
| 0111③:26 | 謹 | 無 | 26・4 | 下 | 紅柳 | 0112③:128 | 崩 | 無 | 21・3 | 上 | 紅柳 |
| 0111③:30 | 崩 | 無 | 18・3 | 伝 | 松 | 0112③:160 | ? | 有 | 10・4 | 下 | 紅柳 |
| 0111③:38 | 崩 | 有 | 17・5.5 | 上 | 紅柳 | 0112④:1 | 謹 | 有 | 15・3 | 下 | 紅柳 |
| 0111③:55 | 崩 | 有 | 13・6 | 上 | 紅柳 | 0113①:1 | 崩 | 無 | 26・3 | 下 | 紅柳 |
| 0111③:68 | 崩 | 無 | 18・3 | 伝 | 紅柳 | 0113②:42 | 謹 | 無 | 18・5 | 伝 | 松 |
| 0111③:72 | 謹 | 無 | 25・3 | 上 | 紅柳 | 0113②:47 | 謹 | 無 | 18・3 | 伝 | 松 |
| 0111③:73 | 謹 | 有 | 15・5 | 下 | 紅柳 | 0113②:48 | 謹 | 無 | 22・4 | 伝 | 松 |
| 0111③:74 | 謹 | 有 | 14・4 | 下 | 紅柳 | 0113②:85 | 謹 | 無 | 14・5 | 伝 | 松 |
| 0111④:9 | 謹 | 有 | 13.5・3 | 下 | 紅柳 | 0113②:86 | 謹 | 有 | 14・5 | 下? | 紅柳 |
| 0112①:37 | 崩 | 無 | 18・3 | 下 | 胡楊 | 0113②:93 | 謹 | 無 | 20・3 | 伝 | 松 |
| 0112①:46 | 崩 | 有 | 19・4 | 上? | 松 | 0113②:152 | 崩 | 無 | 10・2 | 伝 | 紅柳 |
| 0112②:1 | 崩 | 無 | 13.5・4 | 下 | 松 | 0113②:153 | 謹 | 有 | 20・3 | 下 | 紅柳 |
| 0112②:15 | 崩 | 有 | 13・3.5 | 下 | 紅柳 | | | | | | |
| 0112②:26 | 崩 | 有 | 17.5・4 | 下 | 紅柳 | | | | | | |
| 0112②:68 | 崩 | 無 | 11・2 | 上? | 紅柳 | | | | | | |
| 0112③:6 | 謹 | 有 | 14・5 | 下 | 紅柳 | | | | | | |

・糸軸の都合上、簡番号はI 90DXT、I 91DXT、II 90DXTの表記を略し、細掛けなしをI 90DXT、薄い細掛けをI 91DXT、濃い細掛けをII 90DXTとした。
 ・字…文字が謹直かどうか
 ・幅・厚の数値はmm
 ・種別…上=上行文書、平=平行文書、下=下行文書

地域・官署による簡牘形状の違い 高村

一覧表1-2 玉門関漢簡「兩行」一覧表

| 簡番号 | 字 | 稜 | 幅 | 種別 |
|--------------|---|----|----|----------------|
| I 98DYT1:2 | 謹 | 無 | 27 | 不明 |
| II 98DYT1:9 | 謹 | 有 | 13 | 不明 |
| II 98DYT1:11 | 謹 | 無 | 10 | 不明 |
| II 98DYT1:27 | 謹 | 有 | 17 | 下 |
| II 98DYT1:31 | 謹 | 有 | 20 | 上 |
| II 98DYT1:35 | 謹 | 無 | 23 | 不明 |
| II 98DYT2:3 | 謹 | 有 | 24 | 下 |
| II 98DYT2:4 | 謹 | 有 | 18 | 下 |
| II 98DYT2:24 | 謹 | 有 | 13 | 下 |
| II 98DYT4:7 | 謹 | 無 | 17 | 不明 |
| II 98DYT4:19 | 謹 | 有 | 15 | 上 |
| II 98DYT5:2 | 謹 | 有 | 22 | 下 |
| II 98DYT5:4 | 謹 | 無? | 22 | 上 |
| II 98DYT5:23 | 謹 | 有 | 28 | 下 |
| 98DYC:26+46 | 謹 | 無 | 16 | 上? |
| DB:237 | 謹 | 有 | 17 | 下 |
| DB:296 | 謹 | 有 | 一 | 下 |
| DYK:1 | 崩 | 無 | 27 | 上 |
| DYK:5 | 謹 | 有 | 16 | 下? 下部 三行 |
| 1236 | 謹 | 無 | 16 | 下 |
| 1238 | 謹 | 無 | 13 | 上 |
| 1254 | 崩 | 有 | 17 | 下 |
| 1292 | 謹 | 無? | 15 | 上 |
| 1294 | 崩 | 有 | 10 | 上 |
| 1295 | 謹 | 無 | 14 | 上 |
| 1300 | 崩 | 有 | 19 | 下 |
| 1301 | 謹 | 有 | 12 | 上 |
| 1313 | 謹 | 有 | 18 | 下 |
| 1319 | 謹 | 無 | 18 | 下 |
| 1364 | 謹 | 無 | 17 | 下 |
| 1365 | 崩 | 無 | 15 | 下 |

・幅の数値はmm

一覧表1-3 馬圈湾漢簡「兩行」簡一覧表

| 簡番号 | 字 | 稜 | 種別 |
|------|---|---|----|
| 3 | 謹 | 無 | 不明 |
| 263 | 謹 | 無 | 下 |
| 397 | ? | 有 | 上 |
| 483 | 謹 | 無 | 不明 |
| 619 | 謹 | 無 | 不明 |
| 696 | 謹 | 有 | 下 |
| 701 | 謹 | 有 | 下 |
| 770 | 崩 | 無 | 上 |
| 796 | 謹 | 無 | 上 |
| 847 | 謹 | 有 | 下 |
| 988 | 謹 | 無 | 下 |
| 1064 | 謹 | 有 | 上 |
| 1065 | 崩 | 有 | 下 |
| 1105 | ? | 有 | 下 |
| 1108 | 謹 | 有 | 下 |
| 1162 | 謹 | 有 | 下 |

—覽表2-1 一九三〇年代出土居延漢簡・地灣漢簡「阿行」簡一覽表

| 簡番号 | 字 | 幅・厚 | 種別 | 出土 | 簡番号 | 字 | 幅・厚 | 種別 | 出土 | 簡番号 | 字 | 幅・厚 | 種別 | 出土 | | | |
|-------------|---|------|------|----|------|-----------|-----|------|------|-----|------|--------------|----|------|------|-----|-----|
| 3.14 | 譚 | 24・4 | 上 | A8 | 20.8 | 譚 | 無 | 19・5 | 不明 | A33 | 50.1 | 譚 | 無 | 21・5 | 平? | A32 | |
| 3.20 | 譚 | 無 | 21・4 | 上 | A8 | 20.11 | 崩 | 無 | 20・3 | F | A33 | 52.32 | 譚 | 無 | 19・4 | 上 | A8 |
| 4.1 | 譚 | 無 | 26・3 | F | A8 | 20.12 | 譚 | 無 | 18・2 | 上 | A33 | 52.45 | 譚 | 無 | 19・4 | 上 | A8 |
| 4.16 | 譚 | 無 | 20・3 | 上 | A8 | 24.13 | 崩 | 無 | 23・5 | 上 | A21 | 56.35 | 譚 | 無 | 22・4 | 上 | A8 |
| 5.10 | 譚 | 無 | 16・4 | F | A33 | 25.4 | 崩 | 無 | 16・4 | 上 | A21 | 57.10 | 譚 | 無 | 23・4 | 上 | A8 |
| 255.22+5.18 | 譚 | 無 | 27・3 | 上 | A33 | 26.6 | 譚 | 無 | 18・4 | 上 | A8 | 61.9 | 譚 | 無 | 19・3 | F | A8 |
| 6.5 | 譚 | 無 | 21・4 | 上 | A8 | 26.9 | 譚 | 無 | 26・4 | 不明 | A8 | 72.10 | 譚 | 無 | 18・3 | 不明 | A8 |
| 6.8 | 譚 | 無 | 17・3 | 上 | A8 | 28.1 | 譚 | 無 | 24・5 | 上 | A8 | 75.9 | 譚 | 無 | 24・3 | 上 | A32 |
| 6.13 | 譚 | 無 | 19・3 | 上 | A8 | 28.4 | 譚 | 無 | 21・5 | 上 | A8 | 77.6 | 譚 | 無 | 28・2 | 上 | A32 |
| 7.29 | 譚 | 無 | 28・4 | F | A33 | 28.15 | 譚 | 無 | 20・3 | 上 | A8 | 77.34 | 譚 | 無 | 16・3 | 不明 | A32 |
| 7.31 | 譚 | 無 | 24・3 | 上 | A33 | 29.7 | 崩 | 無 | 19・4 | F | A32 | 77.77 | 譚 | 無 | 19・2 | F | A32 |
| 10.11 | 譚 | 無 | 26・3 | 上 | A33 | 30.7 | 譚 | 無 | 13・3 | 不明 | A8 | 81.4 | 崩 | 無 | 27・3 | 佺 | A22 |
| 10.27 | 譚 | 無 | 16・4 | F | A33 | 33.4 | 譚 | 無 | 15・5 | 上 | A8 | 81.10 | 譚 | 無 | 20・4 | 佺 | A22 |
| 10.29 | 譚 | 無 | 18・4 | F | A33 | 33.8 | 譚 | 無 | 16・4 | F | A8 | 84.23 | 譚 | 無 | 16・4 | 上 | A8 |
| 10.30 | 譚 | 無 | 16・5 | F | A33 | 33.22 | 譚 | 無 | 22・4 | 上 | A8 | 88.12 | 譚 | 無 | 18・3 | 上 | A10 |
| 10.31 | 譚 | 無 | 17・4 | F | A33 | 34.9+34.8 | 譚 | 無 | 24・5 | 不明 | A8 | 89.1 | 崩 | 無 | 28・3 | 上 | A8 |
| 10.33 | 譚 | 無 | 18・4 | F | A33 | 35.8 | 崩 | 無 | 16・4 | 上 | A8 | 97.1 | 譚 | 無 | 14・3 | 上 | A33 |
| 10.34 | 譚 | 無 | 20・3 | 上 | A33 | 35.22 | 譚 | 無 | 20・4 | 上 | A8 | 113.12 | 崩 | 無 | 16・4 | F | A8 |
| 10.35 | 譚 | 無 | 28・2 | 上 | A33 | 37.11 | 譚 | 無 | 27・2 | 不明 | A32 | 117.31 | 譚 | 無 | 17・3 | 不明 | A33 |
| 10.40 | 崩 | 無 | 17・3 | F | A33 | 37.50 | 譚 | 無 | 24・3 | 不明 | A32 | 118.17 | 譚 | 無 | 15・3 | 不明 | A33 |
| 11.9 | 譚 | 無 | 25・2 | F | A33 | 37.51 | 譚 | 無 | 24・3 | 佺? | A32 | 122.7 | 譚 | 無 | 39・3 | 上? | A8 |
| 15.18 | 譚 | 無 | 25・4 | 平 | A32 | 40.2 | 譚 | 無 | 17・5 | F | A8 | 76.61+122.29 | 譚 | 無 | 15・1 | F | A8 |
| 16.4 | 譚 | 無 | 19・3 | F | A7 | 40.6 | 崩 | 無 | 20・5 | F | A8 | 122.30 | 譚 | 無 | 10・2 | 上 | A8 |
| 16.10 | 譚 | 無 | 22・4 | F | A7 | 40.25 | 崩 | 無 | 13・2 | 不明 | A8 | 125.37 | 譚 | 無 | 18・2 | 上 | A33 |
| 18.22 | 譚 | 無 | 17・2 | 上 | A8 | 45.9 | 譚 | 無 | 21・3 | 上 | A8 | 127.12 | 譚 | 無 | 24・2 | 平? | A8 |
| 19.34 | 崩 | 無 | 23・7 | 上 | A35 | 46.10 | 崩 | 無 | 17・5 | 上 | A8 | 127.27 | 譚 | 無 | 16・4 | 上 | A8 |
| 20.7 | 譚 | 無 | 16・4 | F | A33 | 46.24 | 譚 | 無 | 20・4 | 上 | A8 | 127.29 | 譚 | 無 | 17・4 | 上 | A8 |

地域・官署による簡牘形状の違い 高村

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------|-----|------|------|-----|--------|--------|---|------|------|----|--------|-----------|---|------|------|-----|-----|
| 簡番号 | 字 | 稜 | 幅・厚 | 種別 | 出土 | 簡番号 | 字 | 稜 | 幅・厚 | 種別 | 出土 | 簡番号 | 字 | 稜 | 幅・厚 | 種別 | 出土 |
| 127.31 | 禮 | 無 | 19・3 | 上 | A8 | 173.31 | 崩 | 無 | 21・5 | 上 | A8 | 231.74 | 禮 | 無 | 15・2 | 下 | A8 |
| 133.36 | 禮 | 有 | 19・6 | 不明 | A8 | 175.12 | 禮 | 無 | 32・5 | 不明 | A8 | 232.12 | 禮 | 無 | 17・3 | 不明 | A33 |
| 132.32+132.35 | 禮 | 無 | 15・3 | 上 | A8 | 175.13 | 禮 | 無 | 27・4 | 下 | A8 | 233.2 | 禮 | 無 | 18・5 | 下 | A21 |
| 132.38 | 禮 | 無 | 19・4 | 下 | A8 | 177.4 | 禮 | 無 | 21・2 | 上 | A33 | 234.10+11 | 禮 | 無 | 20・4 | 上 | A8 |
| 133.11 | 崩 | 無 | 13・4 | 不明 | A8 | 178.17 | 禮 | 無 | 22・3 | 平 | A8 | 240.22+2 | 禮 | 無 | 17・5 | 下 | A21 |
| 136.41 | 禮 | 無 | 15・3 | 下 | A8 | 179.9 | 崩 | 無 | 20・4 | 下 | A33 | 250.1 | 禮 | 無 | 17・5 | 上 | A33 |
| 224.18+137.3 | 禮 | 無 | 18・3 | 上 | A8 | 183.14 | 禮 | 無 | 19・4 | 上 | A33 | 254.10 | 禮 | 無 | 17・5 | 下 | A8 |
| 139.13 | 禮 | 無 | 20・3 | 下 | A8 | 193.25 | 禮 | 無 | 20・3 | 不明 | A8 | 254.13 | 崩 | 無 | 25・4 | 不明 | A8 |
| 139.36+142.33 | 禮 | 無 | 20・4 | 下 | A8 | 198.6 | 崩 | 無 | 17・2 | 上 | A8 | 255.23 | 禮 | 無 | 22・4 | 上? | A33 |
| 140.2 | 崩 | 無 | 11・3 | 佷 | A32 | 199.1 | 禮 | 無 | 23・5 | 上 | A33 | 255.27 | 禮 | 無 | 19・3 | 不明 | A33 |
| 141.1 | ? 無 | 14・2 | 上 | A33 | 203.22 | 禮 | 無 | 18・3 | 下 | A8 | 255.30 | 禮 | 無 | 17・4 | 不明 | A33 | |
| 141.2 | 禮 | 無 | 18・3 | 上 | A33 | 203.41 | 禮 | 無 | 17・4 | 上 | A8 | 255.40 | 禮 | 無 | 23・4 | 上 | A33 |
| 143.16+143.22 | 禮 | 無 | 26・3 | 上 | A8 | 204.4 | 崩 | 無 | 12・3 | 不明 | A32 | 257.22 | 禮 | 無 | 25・3 | 上 | A8 |
| 145.15 | 禮 | 無 | 21・3 | 上 | A8 | 206.5 | 崩 | 無 | 15・4 | 佷 | A32 | 259.3 | 禮 | 無 | 23・3 | 上 | A8 |
| 156.26 | 崩 | 無 | 26・2 | 不明 | A8 | 206.5 | 禮 | 無 | 28・4 | 下 | A8 | 262.26 | 禮 | 無 | 18・4 | 下 | A8 |
| 157.5 | 禮 | 無 | 20・4 | 平 | A8 | 206.9 | 崩 | 無 | 18・3 | 下 | A8 | 264.6 | 崩 | 無 | 10・5 | 上 | A8 |
| 157.6 | 禮 | 無 | 16・3 | 上 | A8 | 213.15 | 禮 | 無 | 17・3 | 下 | A33 | 264.9 | 禮 | 無 | 19・3 | 上 | A8 |
| 157.20 | 崩 | 無 | 21・4 | 平 | A8 | 213.22 | 禮 | 無 | 15・3 | 上 | A33 | 264.30 | 崩 | 無 | 26・4 | 下 | A8 |
| 157.24 | 禮 | 無 | 25・4 | 下 | A8 | 213.40 | 禮 | 無 | 23・2 | 下 | A33 | 265.30 | 禮 | 無 | 15・3 | 上 | A8 |
| 157.29 | 禮 | 無 | 17・5 | 上 | A8 | 213.41 | 禮 | 無 | 29・5 | 上? | A33 | 266.16 | 禮 | 無 | 18・4 | 上 | A8 |
| 159.14 | 禮 | 無 | 20・4 | 上 | A8 | 214.33 | 禮 | 無 | 19・3 | 下 | A8 | 266.17 | 禮 | 無 | 17・3 | 不明 | A8 |
| 159.21 | 禮 | 無 | 20・3 | 上 | A8 | 220.13 | 崩 | 無 | 12・2 | 下 | A8 | 266.19 | 禮 | 無 | 20・2 | 上 | A8 |
| 160.3 | 禮 | 無 | 20・3 | 上 | A8 | 220.19 | 禮 | 無 | 11・3 | 上 | A8 | 267.15 | 禮 | 無 | 26・4 | 上 | A8 |
| 160.4 | 禮 | 無 | 24・3 | 下 | A8 | 224.19 | 禮 | 無 | 18・3 | 上 | A8 | 267.19 | 禮 | 無 | 27・4 | 下? | A8 |
| 160.6 | 禮 | 無 | 19・3 | 下 | A8 | 224.34 | 禮 | 無 | 18・4 | 上 | A8 | 267.25 | 禮 | 無 | 19・3 | 下 | A8 |
| 160.15 | 禮 | 無 | 18・5 | 下 | A8 | 225.29 | 禮 | 無 | 10・2 | 不明 | A8 | 269.3 | 禮 | 無 | 20・4 | 上 | A33 |
| 168.7 | 禮 | 無 | 18・3 | 上 | A8 | 225.31 | 禮 | 無 | 21・3 | 下? | A8 | 270.20 | 禮 | 無 | 21・4 | 佷? | A8 |
| 170.3 | 崩 | 無 | 15・5 | 佷 | A21 | 225.42 | 禮 | 無 | 23・3 | 不明 | A8 | 271.3 | 崩 | 無 | 19・3 | 上 | A8 |
| 170.5 | 崩 | 無 | 12・3 | 上 | A21 | 231.13 | 崩 | 無 | 15・5 | 上 | A8 | 271.18 | 禮 | 無 | 22・5 | 下 | A8 |

| 簡番号 | 字 | 稜 | 幅・厚 | 種別 | 出土 | 簡番号 | 字 | 稜 | 幅・厚 | 種別 | 出土 |
|---------------|---|---|------|----|-----|----------------|---|---|------|----|-----|
| 271.21 | 讀 | 無 | 19・3 | 平 | A8 | 506.9 | 讀 | 無 | 24・4 | 平 | A35 |
| 276.2 | 讀 | 無 | 22・3 | 不明 | A8 | 511.40 | 讀 | 無 | 29・4 | 上 | A35 |
| 282.7 | 讀 | 無 | 25・4 | 上 | A8 | 520.1 | 讀 | 無 | 17・4 | 不明 | A35 |
| 282.10 | 崩 | 無 | 19・5 | 平 | A8 | 536.5 | 讀 | 無 | 19・4 | 上 | A33 |
| 284.1 | 讀 | 無 | 27・5 | 上 | A33 | 536.14 | 讀 | 無 | 21・4 | 上 | A33 |
| 284.2 | 讀 | 無 | 19・5 | 上 | A33 | 558.3 | 讀 | 無 | 19・5 | 下 | A33 |
| 284.4 | 讀 | 無 | 25・4 | 上 | A33 | 585.4 | 讀 | 無 | 19・3 | 不明 | A33 |
| 287.11 | 讀 | 無 | 16・3 | 不明 | A8 | C15 | 讀 | 無 | 18・3 | 上 | ―― |
| 290.6 | 崩 | 無 | 19・3 | 下 | A21 | C18 | 讀 | 無 | 21・3 | 下 | ―― |
| 513.17+303.15 | 讀 | 無 | 18・3 | 不明 | A35 | C19 | 讀 | 無 | 25・3 | 上 | ―― |
| 303.44 | 崩 | 無 | 20・4 | 上 | A35 | C22 | 讀 | 無 | 27・3 | 上 | ―― |
| 306.12 | 讀 | 無 | 14・3 | 上 | A33 | 86EDT1:1 | 讀 | 無 | 25・5 | 下 | A33 |
| 306.20 | 崩 | 無 | 20・5 | 上 | A33 | 86EDT1:3 | 讀 | 無 | 24・2 | 上 | A33 |
| 312.24 | 讀 | 無 | 23・5 | 上 | A8 | 86EDT1:15 | 讀 | 無 | 17・4 | 下 | A33 |
| 326.7 | 讀 | 無 | 19・4 | 下 | A8 | 86EDT7:2 | 讀 | 無 | 20・4 | 上 | A33 |
| 329.1 | 讀 | 無 | 26・4 | 上 | A33 | 86EDT34:2 | 崩 | 無 | 25・4 | 下 | A33 |
| 332.4 | 讀 | 無 | 23・4 | 上 | A33 | 86EDT65:1 | 讀 | 無 | 25・3 | 上 | A33 |
| 337.10 | 讀 | 無 | 21・4 | 上 | A33 | 86EDT5H:9+21 | 讀 | 無 | 16・2 | 上 | A33 |
| 395.15 | 讀 | 無 | 21・4 | 上 | P9 | 86EDTH:14I+160 | 讀 | 無 | 15・3 | 上 | A33 |
| 403.3 | 崩 | 無 | 17・3 | 下? | A33 | 86EDC:1 | 讀 | 無 | 21・2 | 不明 | A32 |
| 507.7+495.9 | 讀 | 無 | 18・3 | 下 | A35 | 86EDC:3 | 讀 | 無 | 19・3 | 伝 | A32 |
| 504.13 | 讀 | 無 | 24・4 | 上 | A35 | | | | | | |

- ・網掛けは地湾漢簡。
- ・字…文字が讀直かどうか
- ・幅・厚の数値はmm
- ・種別…上=上行文書、平=平行文書、下=下行文書

地域・官署による簡牘形状の違い 高村

一覧表2-2 1970年代居延漢簡「兩行」簡一覧表

| |
|---|
| T1.1, T2.9, T2.15, T3.10, T4.1, T4.48, T4.50, T4.52, T4.85, T5.1, T5.16, T5.26, T5.55, T5.77, T5.125, T5.170, T5.299, T7.9, T7.23, T7.35, T8.1, T10.2, T11.2, T13.1, T13.4, T16.3, T20.4, T20.31, T40.9, T43.6, T43.12, T43.31, T43.99, T43.306, T48.1, T48.25, T48.26, T48.56, T48.132, T50.16, T50.48, T50.208, T51.30, T51.39, T51.40, T51.47, T51.52, T51.56, T51.189, T51.190, T51.194, T51.195, T51.196, T51.198, T51.199, T51.200, T51.201, T51.202, T51.207, T51.215, T51.228, T51.244, T51.264, T51.336, T51.365, T51.410, T51.411, T51.413, T51.462, T51.477, T51.480, T51.510, T52.16, T52.30, T52.83, T52.90, T52.96, T52.98, T52.100, T52.104, T52.105, T52.108, T52.110, T52.111, T52.116, T52.142, T52.148, T52.175, T52.264, T52.265, T52.266, T52.304, T52.373, T52.398, T52.401, T52.414, T52.416, T52.485, T52.490, T52.519, T52.521, T52.523, T52.530, T52.817, T53.22, T53.25, T53.26, T53.67, T53.69, T53.70, T53.71, T53.72, T53.74, T53.138, T53.139, T53.186, T53.316, T54.5, T54.8, T55.6, T56.6, T56.65, T56.67, T56.182, T56.183, T56.254, T56.257, T56.261, T56.262, T56.273, T56.275, T56.283, T56.287, T56.336, T56.343, T57.10, T57.12, T57.15, T57.48, T57.49, T57.52, T57.55, T57.85, T57.90, T57.92, T57.97, T58.22, T58.43, T58.44, T58.45, T58.47, T58.50, T58.82, T59.1, T59.2, T59.3, T59.4, T59.8, T59.9, T59.49, T59.56, T59.57, T59.58, T59.60, T59.93, T59.94, T59.155, T59.157, T59.159, T59.160, T59.161, T59.162, T59.163, T59.249, T59.341, T59.348, T59.396, T59.514, T59.536, T59.548, T59.551, T59.553, T59.556, T59.653, T59.654, T59.798, T65.24, T65.46, T65.125, T65.220, T65.221, T65.313, T65.398, T65.404, T65.410, T65.437, T65.450, T65.451, T65.452, T65.506, T68.216, F22.21, F22.22, F22.23, F22.24, F22.25, F22.26, F22.27, F22.28, F22.29, F22.30, F22.31, F22.32, F22.34, F22.35, F22.37, F22.38, F22.39, F22.41, F22.42, F22.43, F22.44, F22.45, F22.46, F22.47, F22.48, F22.49, F22.50, F22.51, F22.52, F22.53, F22.54, F22.55, F22.56, F22.61, F22.62, F22.63, F22.64, F22.65, F22.66, F22.67, F22.68, F22.69, F22.70, F22.71, F22.80, F22.81, F22.82, F22.125, F22.153, F22.154, F22.173, F22.221, F22.247, F22.320, F22.324, F22.325, F22.326, F22.328, F22.329, F22.330, F22.331, F22.332, F22.452, F22.453, F22.454, F22.455, F22.456, F22.459, F22.460, F22.462, F22.464, F22.690, F22.691, F22.693, F22.694, F22.695, F22.696, F22.699, F22.700, F22.825, W10, S4T1.11, S4T2.30, S4T2.59, S4T2.63, S4T2.113, ESC73 |
|---|

※居延漢簡簡番号 E.P. は省略。網掛けは有稜「兩行」簡。

一覧表2-3 肩水金関漢簡「兩行」簡一覧表

地域・官署による簡牘形状の違い
高村

| |
|---|
| <p>T1.156, T2.22, T2.53, T2.83, T3.1, T3.11, T3.12, T3.13, T3.65, T3.113, T4.103, T5.7, T5.68, T5.76, T6.23, T6.45, T7.22, T7.23, T7.25, T7.26, T7.30, T7.97, T8.8, T8.13, T8.16, T8.36, T8.51, T8.55, T9.5, T9.47, T9.59, T9.205, T9.231, T9.250, T9.322, T10.200, T10.203, T10.204, T10.206, T10.207, T10.209, T10.215, T10.238, T10.247, T11.15, T14.31, T14.32, T14.33, T15.13, T21.38, T21.42, T21.43, T21.59, T21.102, T21.108, T21.127, T21.157, T21.173, T21.239, T22.20, T22.25, T23.61, T23.79, T23.153, T23.200, T23.291, T23.295, T23.301, T23.349, T23.350, T23.352, T23.380, T23.573, T23.619, T23.620, T23.729, T23.731, T23.855, T23.877, T23.878, T23.966, T24.8, T24.22, T24.25, T24.31, T24.32, T24.40, T24.45, T24.247, T24.378, T24.379, T24.616, T25.27, T25.46, T25.87, T26.1, T26.94, T27.52, T27.55, T28.8, T28.16, T28.18, T28.44, T28.55, T28.63, T28.107, T28.113, T29.11, T29.34, T29.115, T29.116, T30.26, T30.34, T30.42+69, T30.57, T30.82, T30.88, T30.94, T30.163, T30.179, T30.180, T30.202, T30.204, T30.205, T30.215+217, T31.62, T31.63, T31.64, T31.65, T31.68, T31.69, T32.43, T33.72, T34.1, T34.2, T37.29, T37.33, T37.52, T37.55, T37.96, T37.276, T37.520, T37.525, T37.526, T37.528, T37.529, T37.530, T37.531, T37.640+707, T37.706, T37.778, T37.780, T37.781, T37.783, T37.788, T37.800, T37.913, T37.1061, T37.1062, T37.1063, T37.1065, T37.1098, T37.1100, T37.1134, T37.1149, T37.1309, T37.1311, T37.1377, T37.1450, T37.1454, T37.1498, T37.1501, T37.1502, T37.1503, T37.1537, H2:25, H2:78, F1:1, F1:2, F1:4, F1:5, F1:6, F1:7, F1:8, F1:9, F1:10, F1:11, F1:12, F1:13, F1:14, F1:15, F1:79, F3:39, F3:40, F3:114+202+168, F3:117, F3:118, F3:120, F3:123, F3:125, F3:153, F3:155, F3:181, F3:184, F3:186+188, F3:470+564+190+243, F3:334+299+334, F3:327, F3:508, F3:518+517, T4H:10+61, D:30, D36, D43, D45, D64, D65, D270, C:2, C:446, C:525, C:551, C:603, C:604, C:653, C:655, C:656, C:664</p> |
|---|

※肩水金関簡番号 E.J. は省略。網掛けは有稜「兩行」簡の可能性あり。

TOYO GAKUHO

THE JOURNAL OF THE RESEARCH DEPARTMENT OF
TOYO BUNKO

Vol. 104, No. 3

December 2022

Differences in the Shape of Bamboo and Wooden Slips Depending on
the Region and the Government Office: With a Focus on “Two-line” Slips
among the Dunhuang Han Slips

TAKAMURA Takeyuki

It is widely known that there are “two-line” (*lianghang* 兩行) slips among bamboo and wooden slips from the Han period. Among these “two-line” slips dating from the second half of the Former Han and unearthed in the Hexi 河西 region, there exist two types: one type has a ridge down the centre of the writing surface which divides the two lines, while the other type has a flat surface with no ridge. However, in the past there has been no examination of this difference. In this article, I focus primarily on the “two-line” slips among the Dunhuang 敦煌 Han slips, unearthed in former Dunhuang Commandery in Hexi, and compare them with the “two-line” slips among the Juyan 居延 Han slips unearthed in former Zhangye 張掖 Commandery, also in Hexi. By this means, I clarify the fact that there exist various differences, starting with the shape of slips of the same type, between regions and government offices, and I also gain leads for adding further depth to research so that it extends to regional differences between slips.

There was found a clear-cut difference between the Dunhuang Han

slips, which include roughly the same number of “two-line” slips with a ridge and without a ridge, and the Juyan Han slips, which include almost no “two-line” slips with a ridge. In the case of the Xuanquan 懸泉 Han slips from Dunhuang, wood from the tamarisk (*hongliu* 紅柳; *Tamarix ramosissima*) is used in more than 70% of the “two-line” slips with ridges, and few of them have been made from spruce (*song* 松; *Picea neveitchii* or *Picea crassifolia*), used in many of the “two-line” slips without a ridge. In addition, the “two-line” slips with ridges are narrower than those without a ridge. In view of these facts, it is to be surmised that in order to make effective use of the branches of the tamarisk, which, properly speaking, are unsuitable for making “two-line” slips because they are comparatively narrow, and produce “two-line” slips, the branches were processed in the same way as “two-line” bamboo slips so as to add ridges to them. It was for this reason that regional differences in shape arose among slips of the same type.

When one examines the reasons for these differences, it is to be surmised that differences in regional conditions lay behind them. That is to say, the Juyan region belonged to Zhangye Commandery, where a transportation route had been established to the Qilian 祁連 Mountains where spruce suitable for making wide “two-line” slips were produced, whereas Dunhuang Commandery did not have a large supply of spruce because it was a long way from the Qilian Mountains and use could not be made of transportation by water or some other means.

On the Establishment of the Practice of the Appointment of *Guksa* to
a Monk from the Royal Family in the Goryeo Dynasty

NAKAMURA Shinnosuke

Goryeo was a country that existed on what is now known as the Korean Peninsula for 475 years, from 918 to 1392. For the sake of the prosperity and